

コミュニウスにおける Methodus analytica 及び Methodus syncritica

——V・イエリネクの見解への疑問

—

コミュニウスの『言語の・最新の方法』(Novissima Linguarum Methodus.)⁽¹⁾の『第一〇章。言語の・最新の方法の基礎、教授學』(Caput X. *Methodi Linguarum novissimae fundamentum, Ars DIDACTICA*)を、『ロムニウス⁽²⁾の分析的教授學』(The Analytical Didactic of Co-menius: translated from the Latin with Introduction and Notes by Vladimir Jelinek, The Univ. of Chicago Press, 1953, xvii, 239 p.)の表題のもとに譯出したイエリネク⁽³⁾は、ほん譯本文への‘Introduction’⁽²⁾として三編の論作を付しているが、その第一‘Preliminary Remarks’

の中に、コミュニウスの教授學の方法は《類比》(syncritis)のそれから《分析》のそれに變化し、變化することによって眞の教授學となるにいたった、とする見解が示されている。

すなわち、——イエリネクにしたがえば、第一に、コミュニウスが一六二八年から一六三二年の間に執筆した・ボクミア語『教授學』(Didaktika.)⁽⁴⁾と、一六三三年から一六三八年の間にこれを訂正しながらラテン語にほん譯してなった『大教授學』(Didactica Magna.)⁽⁴⁾と、一六四四年から一六四七年の間に制作された・この『言語の・最新の方法、第一〇章。教授學』との三作品を比較する時、『第一〇章』は、單に作品の順序において

鈴木秀勇

「第三の・そして最後の」コメニウス教授學であるばかりでなく、「またそれは、問題への・全く新しいアプローチ、すなわち、先行する二作品とはうって變つた・分析的・演繹的處理を表わす」ものであり、「三つの教授學について指導的な思想は大方、基本的にはひとしいにしても、『分析的教授學』における・それらの思想の・嚴格に分析的・演繹的な處理は、ボヘミア語『教授學』および『大教授學』の・比較的・類似的方法 (the comparative and analogical method) と鋭い對照をなしている」。

『分析的教授學』は、言語學習の方法を示すにあたってその基礎技術を定式化しておく、という意味を含ませられているのであるが、それが主題に迫るさいに「概念の規定、公理、系、をもつてした」ことは(スビノザを想起せよ)、「彼〔コメニウス〕の方法理論における・顯着な變換を表わし、同時に、彼の思考の嚴格性の増大……を反映するものである」(以上、ローヤ)。それほどばかりでない。イエリネクによれば、第二に、『大教授學』から『分析的教授學』への推移における・このような「スタイルの變換は、教授學の本質についての・また、教授學の原理的基礎についての・著者〔コメニウス〕

の思念の變化を反映している。『分析的教授學』こそは眞の教授學であり、教育學方法の理論的根據であり、これに反して、より長文のボヘミア語『教授學』とその對をなすラテン語『大教授學』とは、方法的實踐への手引にすぎない」(p. 18)。

イエリネクが、コメニウスの教育學の見解の歴史は、本來、彼のはん(汎)知學的見解の歴史の一部であり、彼の教授學の思念の變化は、汎知的な教育プログラムをめぐる視野の・絶えざる擴大によって規定されている、とし、『分析的教授學』は、コメニウスの教育理論と汎知學と平和主義、この三者の融合を表わしている、とする解釋は(その論證の手續はなお不十分ではあるが)、われわれにとりすこぶる示唆的であり、なかならず、コメニウス研究史の上で「遺憾ながら從來餘りにも顧みられること少かつた」この『言語の・最新の方法』を、一部ではあれ、ボヘミア語以外で譯出し、この作品の成立の経緯をたずねた意義は、決して小さくないであろう。けれども、はたしてイエリネクとともに、『分析的教授學』こそコメニウス教授學の窮極的形態であり、眞のコメニウス教授學である、と斷定することが許さ

れるかどうか、この點については、むしろか疑問が残るといわざるをえない。われわれは、以下で、第一に、『分析的教授學』における・分析の方法についてをやや紹介し、第二に、『大教授學』における・類比の方法を顧み、第三に、コメニヒウス自身が、これら二方法について、後年どのような評價を下してゐるか、をたずねることにしよう。

(1) この作題には、二つの版本がある。一つは、初版本 'LINGVARUM METHODVS NOVISSIMA, Fundamentis Didacticis solidè superstructa etc.:' [Daniel Vetter. Leszno, 1648.] 8vo. 688 p. である。他は、再版 'NOVISSIMA LINGVARUM METHODVS, etc.:' In 'Opera Didactica Omnia,' Pars II, A 4—N 2 (col. 292), である。この再版の底本は、'Veškeré spisy Jana Amosa Komenského.' Sv. VI, Část II. (Brno, 1911) に所収の初・再版照合本である。

(2) Introduction せ、I. Preliminary Remarks, pp. 3—26; II. History of the "Methodus", pp. 27—33. III. Contents of the "Methodus", pp. 34—92 (尺巻種紙) からなる。

(3) 一六三一年頃のものと思われる。この作品の清書手稿が、一八四一年カーチェン (Josef Káčer) にあり、ホルランドのマンノン (Leszno——ノメリヒウスは一六二八年

初めからここに亡命した) で発見され、ノールキン (Jan E. Purkyn) に報告され、その盡力で一八五一年マンノンの「スウェーデン王国博物館」(現在「國民博物館」) に納められた。草稿の發表は、しかし、一八四九年、トーマスが編集したメモアの序文を付して同博物館刊行『古モノメンタ叢書』第三四巻の中に行われた。'Didaktika (česká). Vydal W. W. Tomek za redakce a súvodem Jos. Chmely-Museum Království Českého. Staročeská Biblioteka. Číslo xxxiv. & Praha, 1849. (Bohumil Novák: J. A. Komenského život, dílo a doba. Praha, 1957. str. 41) 中のマンノン編著の眞實圖説(7)を記す。手稿第一葉の——DIDACTICA to gest Vmění vnišního vyvíčovani; kterak by totiž člověk djiw než na těle wzroste a staw swýg začne, wssemu to[mu] ku potřebě a ozdobjám p[ř]tomne[ho] y budaucyho ziwota p[ř]nálezj sstastne snadne, plne wyvceen, a tak pot[ř]ssene k ziwotu obj[em]u nastrogen býti mohl. Coz se vse mocne, základy z samého p[ř]tirozenj wzaty, prokazuge; vstawčné, p[ř]klady gnyých remsných vmění, wysvětluge; dokonale, na léta, měsýce, dny a hodiny, rozměťuge; a ke wssemu tomu aby k cýli p[ř]ivedeno bylo, y probuzení činj y radu dáwa.——と手記された。この下で書込まがある。

右を現代語にあらためれば——DIDAKTIKA, to jest, Umění umělého vyučování. Kterak by totiž člověk,

- divně než na těle vzroste a stav svůj začne, všemu což k potřebě a ozdobám přítomného i budoucího života přináležejí šťastně, snadně, plně vyučen, a tak potěšeně k životu obojímu nastrojen být mohl. Což se vše mocně zakládá z samého přirození vzaly prokazují; ustavivěné příklady jiných řemeslných umění vysvětlují; dokonale, na léta, měsíce, dny & hodiny rozmeřují; a k všemu aby k cíli přivedeno bylo, i probuzení činní i radu dává. — 直譯「*『教授學』*。別名、巧みな教授の技術。すなわち、人間が、成人し職業に就くに先立ち、現世と來世との生活の必要と美飾とに屬する・すべてこの事柄を、確實に、容易に、徹底的に教授せられ、かくして愉快に雙方の生活への用意を與えられうる方法。このすべて〔の方法〕は、まことに自然そのものからえられた基礎によって有力に立證され、常に他の工作技術の實例によって説明され、年、月、日、時間に完全に配分されて、すべての人があの目標に進ませられるように、これを覺醒させ、その道を教える」。この表題を『大教授學』のそれ(本稿第二節注(1))を比較せられたい。
- (4) われわれが見る『大教授學』は、ODO-I, A₃-K (col. 196) のそれであるが、制作當時のものと思われれる手稿が、ノートリフ遺稿の間から G. H. Turnbull に於て發見せられたる。
- (5) 第二〇章は、全一六二節で、一八七の公理 (Axioma) と五五の系 (Porisma) とから成る。

(6) Franz Hofmann 1948. ODO 新版への評言から
(2) Archiv pro bádání o životě a díle Jana Amose
Komenského. «XVIII—1 (1959) str. 80»。

(7) 400 頁の「*『教授學』*」の J. A. Komenského didaktika analytika. Z latiny vyložil F. J. Zoubek. Praha, 1874. 47 頁。新訳「*Didaktik analytická. Přeložil Helena Businská.* Praha, 1946. 112 str. 47 頁。Analytická Didaktika. Nové preložil……E. Čapek. Praha, 1947, 110 str. 47 頁。」

(8) 前注(2)のように、イェリネクの序文の第二は、この作品の成立経緯をたずねたものである。

二

『言語の・最新の方法』第二〇章は、その章の内容の摘要のあと、直ちに「教授學とは、よく教える〔ための〕學である (*Didactica, est bene docendi ars.*)」という概念規定から始まり(第一節)、「*『い』で、この「よく」と「教える」との概念について、「教えるとは、ある人が知っていることを、また他の人に學ばしめ、知らしめること、*docere est, quod quis scit ut alter quoque discat, & sciat, efficere.*」(第二節)、「また「よく教えるとは、ある人に迅速に、愉快に、徹底的に學ばしめること、*

ある (Bene docere est, ut quis citò, jucundè, solidèque discat, efficere.) (第三節) と規定する。分析が事物の根元に下降することであるとすれば、教授學の規定から進んでここに析出された・三つの要素、すなわち、《教える》(Docere)、『學ぶ』(Discere)、『知る』(Scire) について、さらにコミュニティスが、「教える行為には、知ること (to Scire) が先行するのであるから (なぜなら、自分の知っていないものを「他人に」教えることは、だれにもできない)」、われわれはまず、それ「知ること」を探究しよう」(第六節) として、最も基礎的な《知る》概念の構造解明に進む経緯は、直ちに理解できる。

この解明のさいにきわめて興味深いのは、コミュニティスが、知識を表出としてとらえ、「知るとは、あるものを、心なり、手なり、言語なりによって、模寫できること (effigiarè posse) である (すべてのものは、われわれが模寫 (effigiarè) なくし寫出することによって (imaginarè)」、すなわち、ものの寫像と映像とを表出することによって (imagines & simulaera Rerum effigendo) 生ずる……)」(第七節) と述べていることである。感覺に

よってものをとらえるとは、そのものの寫像が脳に刻みつけられることであり、その模像を手で造るとは、その寫像を物質に刻みつけることであり、心にあるもの、手で造るものを、言葉でつたえるとは、その寫像を空気に刻みつけ、空氣を通じて他人の耳、腦、心に刻みつけることである (同節)。すなわち、ここでは、知識の端緒である感覺自體がすでに表出作用とされ、それが言語と制作とによる表現作用に連動する關係で、知識がとらえられている。われわれは、この把握の背後に、理性 (Ratio)、『言辭 (Oratio)』、制作 (Operatio) の三者を、「神が、それによって人間の本性を飾った」ものとして、一つにつかんでいるコミュニティス (第一章、第五節) を見るのであり、神は人間を、精神 (Ingénio)、『對話 (Sermonè)』、手 (Manibus) の三者によって、武裝した、とする・ジロラーモ・カルダーノ (Girolamo Cardano) への彼の共感を知るのである (同章、第一節)。

たしかに、『第一〇章』が、よく教えることの内容を、學習の迅速、愉快、徹底性と規定していることは、『大教授學』が自らの目的を、あらゆる人にあらゆるものを「簡潔に、愉快に、徹底的に」教える方法の探索に見て

いることと變らない。けれども、『大教授學』が、わずかに「讀者へのあいさつ」の中で、「教授學とは、教える技法をいう」、としるすにとどまり、かつまた、本論においては、教授の確實、容易、徹底、迅速をえる方法の提示を先にし(第一章—第九章)、知識、言語、道德、敬虔を導く方法の論述——しかもその間には統一性がない——を後にしている(第二十章—第二四章)のにたいし、『第一章』は、上記のように、教授學の規定から始めて順次その構成要素に下降するばかりでなく、右に見た・理性・言語・制作の三者統一性にしたがって、知識、思慮、技術、言語の方法のそれぞれを、しかも連關を與えながら展開し(第五〇節—第一二八節)、その後、に、教授の迅速、愉快、徹底性にいたる方法を示すのである(第一二九節—第一六二節)。

ところで、右のように『知る』概念をつかんだコメニユウスは、さらにこれを三つの構成項に分解する。「だから、知識のあるところ、常に三つのもの、すなわち、元型(Idea)、『複製(Ideatum)』、『複製者(Ideans)』がある。いいかえれば、(1)原型(Imago archetypa)、『これが知識の対象である。(2)模型(Imago ectypa)』、『これが知識の

成果である。(3)前者から後者をつくり出す・なんらかの手段、すなわち感覺、手、言語、など』(第八節)。そしてコメニユウスは、この三者が知識にとって最も根元的な・それゆえ最も不可欠な構成要素であることを、公理の形式で示している。すなわち、「公理第一。元型ないし元像(Forma)がなければ、なにもものも知られない。公理第二。複製化(Ideatio)ないし合像(conformatio)がなければ、なにもものも知られない。公理第三。合像の手段、ないし模寫の能力がなければ、なにもものも知られない』(同節)。

このように教授學の概念に含まれる・いくつかの概念の・最も根元にある『知る』概念の構造にまで下降したコメニユウスは、ここから演繹的上昇に轉するのであるが、この上昇は、『學ぶ』概念の規定から始まる。「學ぶとは、ある既知のものによって、ある未知のもの知識へ進むことである」(Disserere est ad scientiam rei ignotae, per aliquam notam, ire) (第九節)。しかし、この段階で再び、『學ぶ』概念の構成要素が析出される。「だから、なにかが學ばれる場合には、常に「そこに」三つのものが相會する。(1)ある・未知のもの(Ignotum aliquod)、『これ

に向って人は進む。(2)ある・既知のもの (Notum ali-
quid)・これによって未知のものに達することができる。
(3)「後者から前者へ向っての」移行の努力 (Transseundi
conatus)・あるいはむしろ、移行そのもの (transitus ip-
se) (第一〇節)。コメニウスによれば、學習 (discen-
tia) とは、テルトゥリアヌスが「學ぶ動き (discendi act-
us)」とするように⁽³⁾、「一種の運動 (motus qui-
dam)」であり、ある運動體〔學習者〕が、所與の限界か
ら他の限界へ前進することであった。出發する限界、知
の始まりは、學習者が豫め知っているもの (praecognitum)
であり、かなたの限界は、未知の事物 (res ignota) であ
る。そして、この運動の・第三の要素は、移行の努力、
ないし「勞苦と精進とによって (labore & studio)」と表
現されている・學習者の主體的熱意である (同節)。そし
てここでもまた、この三者の・學習にたいする要素性
が、「公理第四。未知のものがなければ、學ばれることは
ない。公理第五。既知のものによってでなければ、未知
のものは學ばれない。……系。だから、未知のものは、
未知のものによっては、學ばれない。公理第六。未知の
ものは、學ぶことによってでなければ、學ばれない。…

…系。だから、學ぶためには、勞苦と勤勉とが要求され
る」と示されてくる (同節)。

このように「學ぶ」概念が、「知る」概念から (正確に
は、「知られたもの」と「知られざるもの」との綜合とし
て)、演繹されているとすれば、「教える」概念は、「學
ぶ」者が犯す過誤の可能性の大、ないし必然性から導き
出されてくる。すなわち——初めて旅する者が、どれほ
ど氣を配っても、なお道に迷うことを免れるのはまれで
あり「それゆえ、道に迷うのをおしとどめ、迷える者を
よび戻し、つまずく時には助けおこし、旅を続けさせる
案内者を立てること (ducem habere) は、きわめて有
益であり、いなむしろ不可缺である。學ぶについても、
事情は同じである」(第一一節)。いかえれば「過ちを
犯さずに學ばれるものは、なにもない」(同節)であり、
「學ぶ者にとっては (それゆえ) 案内者、忠告者、匡正
者が常に必要である」(同節)とところに、「教える」ことを
必然にする根拠がある。

コメニウスは、ここであらためて、「教える」概念を
規定して、「教えるとは、學ぶ者を初めて學問に導きいれ
ることである (Docere, est Discentem Doctrina im-

buere)」（第二三節）、とのべ、またしてもトリアーデにしたがう・その要素分解を、「みよここに、教える者、學ぶ者、學問、がある。教える者とは、知識をつたえる者 (qvi scientiam tradit)、學ぶ者とは、「知識を」受けとる者、學問とは、知識の傳達それ自身 (ipsa Scientia traditio) であり、教える者から學ぶ者への「知識の」移行である」とし、《教える》行為にたいする。この三要素の不可缺性を、ふたたび同じ手法で「公理第一一。教える者がなければ、なにごとくも教えられない。公理第一二。學ぶ者がなければ、なにごとくも學ばれない。公理第一三。學問が存在しなければ、知識の移植はありえない」と示している（同節）。ところで、この三要素の・《教える》行為にたいする不可缺性とは、また三者相互の不可分性でもある。「公理第一四。教える者と學ぶ者とは結ばれ合っている。教える行為から兩者のいづれも缺けることはできない。公理第一五。教える者と學ぶ者との紐帯は、前者から後者へ流出する學問である」（第一三節）。

(1) 『大教授學』の表題——「大教授學。すべての人にすべてのものを教える・普遍的な技法。別名、いかなるキリ

スト教王國のあれ、その集落、すなわち都市および村落のすべてにわたり、兩性の全少年が、ひとりの例外もなく、學問を教えられ、徳を磨かれ、敬けん（虔）によって充され、かくして青年期の中に、現世と來世との生活に屬する・すべての事柄を、簡潔に、愉快に、徹底的に教えらるるような學校を、創設する・確實かつ熟考された方法。そのさい、提言されるもの・基礎は、事物の自然そのものから發掘され、眞理は、工作技術の相似例によって論證され、順序は、年、月、日、時間に配分され、最後に、これら（提言されたもの）を成功的に實現する・容易かつ確實な道が示されている」。

(2) ODO-I, A.

(3) イェリネクによれば、これの出典は、'De anima,' 23, 24.

三

しかし、教授學は、《教える》行為の原理的構造を解明するとともに、その基礎に立って、《よく教える》方法を提示するものでなければならぬ。「よく教える者、よく學ぶ者、よき學問が、知識を著るしく増大する」という公理第一六（第一三節）は、コメニウスの思考が、ようやくその主題にまで上昇し立ち戻ったことを示してい

る。けれども、彼はここでもまた、『よく教える者』の規定を(第一四節)、『よく學ぶ者』の規定を(第一五節)、そして『よき學問』の規定を(第一七節)、それぞれ與えずにはいなかった。

まず、よく教える者に要求される「教える力(Docivitas)」とは、「教える知識、教える能力、教える意欲」であり、いいかえれば、(1)他人に教えるものを、自らが知っており、(2)自らが知っているものを、他人に教えることができ、(3)自らが知っておりまた教えることができるものを、教える意欲をもつこと、すなわち、「熱心であり(Gnavus)、勤勉であつて(diligens)、自らがうけている〔知識の〕光の中に、よろこび進んで他人をひたそう」としており(alios in lucem, qvâ gaudet ipse, promovere gestiens)、「教える熱意に燃えている(ardus)」ことである(第一四節)。そして右の(2)から「公理第一八。教師は、教えることに熟達して(Doctus peritus)いなければならぬ(すなわち、教えることに通曉している者(Didacticus)でなければならぬ)」が立てられることによつて知られるように、Didactica(教授學)、とりわけ、後出第一九節以下で述べられる教授方法論は、『よく教

える者』の概念を構成する・右の因子にかかわるものであつた。

第二に、學ぶ者がそなえるべき「教えられる力(Docilitas)」とは、年齢上の條件をも含めて、會得する迅速さ、ないし、天分の豊かさ(Percipiendi promptitudo, seu Ingeniositas)と、識別する力、ないし、判断の鋭敏さ(Diudicandi solertia, seu Judiciositas)および、ひとたび着手したものをひたすらに推し進める炎、すなわち勤勉(Cepta urgendi ardor, qvem Diligentiam vocamus)であり(第一五節)、前出公理第一六における『よく學ぶ者』の概念は、今や、右に示された・天分、判断力、勤勉、この三要素の共同作用の有無として説かれる。すなわち、「公理第二三。天分、判断力、勤勉が同時に結びつけば、めざましい進歩が生ずる。公理第二四。天分、判断力の部分的缺如は、勤勉によつて補われる。公理第二五。天分もなく、判断力も勤勉もなければ、教えても學んでも、全く、あるいは、ほとんど無益である」(第一六節)。

知識を増大する・いま一つの要素である『よき學問』の中にも再び、三つのものが相會する。——「教えられる

事物、すなわち「學問の對象」、それが教えられる仕方、すなわち「教授の方法」、および學問を推進する手段、すなわち「紀律」——である(第一七節)。(この三者のうち、紀律についての論述(第三六節以下)については、本稿で紹介を省略する)。

コメニウスによれば、まず、學問の對象とは、「人間の」自己自身(四肢、感覺、精神、意志、その他)についての、ならびに、外界の事物についての、知(*Scientia*)と、および、それらの・正しい使用(*usus legitimus*)と」であり、これらについての學問の目的は、「それらすべてがわれわれに役立ち(*ut omnia nobis seruiant*)、一つとしてわれわれをきずつけない(*Docere nihil*) ようにする」ところにある(第一八節)。つまり、この規定にしたがえば、外的な事物についての知識のみでなく、またそれらの生産ないし使用のみでなく、人間の自身の使用、たとえば、感覺を使用して知識を獲得する方法も、手を使用しての制作技術も、發聲器官を使用する言語も、意志と四肢とを使用する倫理的行爲も、すべてが——「人間の本性を完成するものである限り」——學問の對象に含まれるのである。いなそればかりではな

い。學問がまさに右のようなものであるゆえに、この學問を教える《方法》それ自身が再び、右にいう學問の中に含まれざるをえない。上に見たようにコメニウスが《教える方法》を、學問の要素の一つと規定した根據は、そのところにあるであろう。

つぎに、學問を教える《方法》——それについての論述は、すでにふれたように、《よく教える者》の概念の・第二の因子にかかわる——もまた、ここで三つの視點から吟味される。すなわち、第一に、學ぶ者の心を、教えられる状態におく方法(第二〇節—第二四節)、第二に、學問をつたえる方法(第二六節—第三三節)、第三に、學問を、學ぶ者の心に定着させる方法(第三四節—第三八節)、がそれである。

すでに第一五節にしろされた *Docilitas* の規定から、「教えられる準備のない者を教えようとしてはならぬ」とする公理第二九(第二〇節)と、その逆、「教えられる準備のある者を教えるに猶豫してはならぬ」とする公理第三〇が導き出される(第二二節)。しかしながら、《よく教える者》にとって、最初の問題は、(學ぶ者にたいして)いかにして學問への準備をなさしめるか、つまり、學問

にたいする嫌悪をとり除き、知識を欲求せしめる方法は、なにか、ということであろう。コミュニケーションによれば、嫌悪の原因は、學問の有用性を理解していないためか (*quia utilitatem non intelligit*)、あるいは、他の事物に心を奪われているためか、ないしは、學問の險しさにおびえているためか、である(第二一節)。しかしながら、「より有用なものを愛する心は、人間の精神に生得的であり」、「よきものの香りを追うことは、自然であり」、「常に活動力に溢れ (*esse actuosum*)、物事を組み伏せようと欲する (*res quaerere subigendas*) のは、人間の精神に固有な性質である」とすれば、學問への嫌悪を除去する道は、ものを知ることがどれほどの有用事であるか、を理解させ、よき學問への欲望を抱かせ、學問の困難はうちかつことができるものであることを、感知させるところにある、とコミュニケーションは示している(第二二節)。

ところで、このようにして、「十分に學問への愛を抱き」「學問への欲望を十分に刺戟され」「探究の身構えの十分な學生」にたいして學問を「つたえる方法」は、さうらになんであるのか。「學問をつたえる思慮の・至高の

法であり光であるもの、中心であり圓周であるもの、基底であり頂極であるものは、ただ、すべては、實例により、指示により、實行ないし模倣によって、教えられるべきである」といふ・この一事に盡きる」(*Tradendi doctrinam prudentiae summa lex de luce, centrum & circumferentia, basis & fastigium, hoc unicum est: ut omnia doceantur per EXEMPLA, per PRAECEPTA, & per VSUM, seu Imitationem.*) (第二六節)。このテーゼが、『第一〇章』の核心の一つであることは、右に見る表現からも知られよう。重要なことは、《學問をつたえる方法》を構成する・右の三要素が、コミュニケーション自ら、實例 (*exempla*) は元型にあたり、模倣 (*imitatio*) は複製にあたり、指示 (*praecipia*) は、複製を指導する手段にあたる、とのべているように、《知る》概念の成素をしるした・前出第八節の公理第一、第二、第三、から導き出されている、ということである。學問が、知識の傳達それ自身である (*Doctrina, ipsa Scientiae traditio*) と規定されるならば、それを傳達する方法は、自らの対象である知識の基本構造に制約されざるをえない。いわゆる・コミュニケーションの直觀教育の方法、*sense-realism* の教授方法が、かつて

『大教授學』においては、外觀 (speculatio seu visio externa) の構造との類比における・内觀 (interna rerum speculatio) の把握に基礎づけられていた(第二〇章)のにたいし、『第一〇章』では、右に見た實例—模倣—指示の構造から導き出されているところに、われわれは、前述した・彼の知識論の意味を知るのである。

四

第一に、コメニウスは、實例、指示、模倣の・それぞれの要素性を、「公理第三五。模倣されるべきもの(すなわち、範例 (Exemplar)) がなければ、なんらの模倣もない。公理第三六。模倣についての教示 (Informatio) (すなわち、指示) がなければ、模倣は容易でなく確實でない。公理第三七。模倣(すなわち、實行、實踐、習練 (Usus, Praxis, Exeritatio) がなければ、模倣についての指示があり模倣されるべきものがあっても、無益である」(第二六節)、あるいは、「公理第三九。實例、指示、習練がなければ、なにことも教えられず、學ばれない。ないしは、正しくは教えられず學ばれない」(第二七節)によって、示しているのであるが、第二に、むしろ主要

なのは、三者の共同作用を「すべては、實例と指示と修練とによって、教えられ學ばれるであろう」と語る公理第四〇である。コメニウスは、この公理を自ら實現するものとして、工作技術の習得をあげる。工匠はその徒弟に、まずモデルを見せ、必要ならば指圖(指示)を與え、モデルを模倣させて造らせて(表現させて)みる (Exemplar……imitandó exprimitur) (第二七節)。この方法は、理論的な事柄についても妥當しよう (Sed idem sit in theoreticis)。他人にものを學ばせたい時には、なによりもまずそれを感覺に示してやる。必要とあれば説明してやる。そしてどれほど理解したかを知るには、「それと同じものを、自分で詳しく描いてみせるように、命ずるがよい」(ipsismet ré[rem] eandem ostentare ac enarrare iubes) (同節)。道徳的な教育についてもまた、方法は同じである (Sic in Moralibus) (同節)。

しかしながら、なにゆえあの三要素は、實例が指示に先行し、模倣ないし實行が全行程を貫ぬく、という秩序を、もたなければならぬのか。コメニウスの論述は、第三に、この點に向けられる。

コメニウスによれば、従來の學校教育の・最も重大

な缺陷の一つは、(ここに析出された三要素の無自覚から)三者の共同作用を無視する教授方法が行われ、ないしは、それらの方法的順序が顛倒していたところに、あるいは、實例を顧みずに、指示のみによって學問を教えようとし (*per Praecipua doceri*)、あるいは、訓示や規則の意味を説明するために、實例をあとから附加する (*Regulatum vero sensum subjectis demum Exemplis illustrari*) にすぎなかつた。けれども「あの三者の・最も自然的な秩序 (*ordo trium illorum naturalissimus*) は、實例が先行し (*praecedant*)、實行がこれに續き、指示が兩者に介在する、ということである」(第二八節)。

この秩序の自然性は、三要素のうち最大の不可缺性をもつものはなにか、によって定まる。たしかに、獨學者 (*autodidactoi*) とよばれる人々は、自己の天分ゆえに、よるべき實例も指示も自ら創出することを許された。けれども、獨學者すらなお缺くことのできないものは、實行であり習練である。なにを學ぶにせよ、これなくしては「かつて成就したためしはなく、將來成就することも断じてないであろう」(第二七節)。このことは、教授と學習との運動の全行程を終始擔うものは、なによりもまず

習練であることを、規定する。

しかしながら獨學者の場合を除けば、人は通常、實例と指示とを案内者からうけとらなければならぬ。「けれども、幸福な天分に恵まれぬ限り、指示によらず、ただ實例のみによって學んでも、成就することはない」(同節)。いいかえれば、習練は通常、指示の助力をえて實例を模倣することであり、模倣における習練であることになる。したがって、あの秩序の自然性は、習練の不可缺性を前提とするならば、實例と指示とのいずれか先行するべきか、にかかることになる。コミュニウスにしたがえば、この優先性を決定する・四つの根據が存在する。第一。「實例は、模倣されるべき對象を、目の前にしかに (*immediate ob oculos*) おくが、指示は、斜めにつまり間接的に (*per obliquum & indirecte*) おく」。しかもかかる時、對象の姿は「それだけで明白であり (*per se pate*)」、間接的におかれる場合には、「それだけで姿はかくれ、實例によって照し出されなければならぬ」 (*per se obiecta est, nisi exemplis clarescat*)。しかるに前出公理第五は、既知のものを通じて初めて、未知のものを學ぶ、と定めている。「だから、それだけで明白

なものが先に、それ「明白なもの」によってあとからあらわにされるものが後に、くることになる (*Ergo quod per se potest, precedat: quod per aliud demum relegitur, sequatur*)。第二。指示は悟性にかかわり、實例は感覺にかかわる。しかるに「いうまでもなく、まず感覺の中になかったもので、悟性の中にあるようなものは一つもな^らず (*nihil quippe est in Intellectu, quod non prius fuerit in Sensu*)」。それゆえやはり、感覺を齎らすもの「實例」が先に、悟性を養うもの「指示」が後に、與えられなければならない。第三。「指示は、ある・形式的なもの (*formale quid*)」であり、實例は、ある・内容的なもの (*materiale*) である」。しかし、「私は、まだ内容もたぬうちから、その内容に形式を與えることはできない。それゆえ、私が指示を與えようとする人が、まだ對象も見ないうちから、その對象についての指示を私が與えることもできない」。第四。すでに指摘されたように、従来の學校教育は、實例によって訓示を「説明する」という・順序の顛倒を犯している。しかしながら、説明する (*illustrare*) とは、燈火 (*lumen*) によって照らすことである。夜の闇を行く時、松明を脊にする者はいな

い。松明を掲げる者を先に立て (*praere*)、前を照らさせる (*praelucere*) のが常である。——この點で、工匠たちは、まことに思慮に富んでいる。技術のルールを徒弟に抽象的に (*abstracte*) つたえようという工匠はいない。徒弟の見ている前で自ら仕事をしてみる。續いて徒弟の手に道具をわたし、その扱い方、模倣の仕方を、指示するのである。「このように、物事の手順を苦もなく教えるのは、物事自身である」(以上、第二八節)。

右のように、指示にたいする・實例の優先性の根據を示したコメニウスは、同時に模倣としての實踐の不可缺性を強調しながら、三要素の自然的秩序について重ねて「公理第四一。範例がいつも先に來、指示はいつも後に續き、模倣の手はいつもひと時も休めるべきでない」を立て、「指示ニヨル道ハ、長クカツ險シ。實例ニヨル道ハ、短クカツ實リ多シ」の教えを引いて、われわれもまた、世に廣く行われている過ちを正し、學ぶ者たちを長く険しい道に迷わせるのでなく、短く實り多い道によって知識のもとに導こうではないか、と訴えるのである (同節)。(實例、指示、模倣について個別的に論述する第三二節以下も、學問を定着させる方法についての論述

も、本稿では紹介を省略する)。

(1) このテーゼは、まず『大教授學』第二〇章「知識の方法。各論的に」の中で、「すべてのは、できる限り、感覺のままに齎せられなければならぬ」といふ、教える者の黄金律の・第一の根據とされ(第六、第七節)、「ついで『第一〇章』の第五〇節以下「知識を植えつける方法」において、「人間の外部におかれた物にとり、「人間の」心への入口が開かれる・あの扉は、ひとり感覺のみである」という意味で、「最高の真理」(第五三節)とよばれているように、コミュニティ教授方法論の核心的命題の一つである。アーレンツク(Hans Ahlbeck)によれば、「これに近似的なテーゼが、トマス・アクィナス『真理について』(De veritate [Quaestiones disputatae, Tom. I.] の中で「…… nihil est in intellectu, quod non sit prius in sensu」と見られる(J. A. C.: Grosse Didaktik, Volk u. Wissen, 1957, S. 317)。

(2) イェリネクによれば、「コミュニティがこの出典をクワインティリアヌスとしてゐるのは誤りであり、セネカ『書簡』である(Jelinek, p. 113, n. 9)。

五

前節までに紹介したのは、『言語の・最新の方法、第一〇章』における・コミュニティの・分析的下降と演繹的

上昇との思考過程の一端にすぎない。『第一〇章』の終始にわたって考察することは、本稿の目的ではないが)上述によつて、ほぼうかがうことができることは、ここでの・コミュニティの思考が、——一貫したトリアーデ方式による——教授學の・その構成諸概念への《分解》と、それぞれの概念の構造因子の《析出》とに注がれ、それらからの・教授法則の《導出》に向けられていた、ということである。それはまことに、コミュニティが、この書の第九章の末尾に、「讀者は注意されよ。大教授學においては、われわれは、この學〔教授學〕の秘密を、類比の方法によつて(Syncriticae)、すなわち、自然と工作技術とが自らの生産にあたつてゐる進行経過を觀察することによつて(observatione processuum circa Opera sua Naturae & Artium mechanicarum)、探究した。今やここまでは、分析の方法によつて(Analyticae)、すなわち、この學そのものを規定し(definendo)、この學をその必要項(目的、手段、および指導様式)に分解し(resolvendo)、こうして科學的に諸法則を説明することによつて、論が進められるであろう」としている・その方法の貫徹に外ならない。(付記するにとどめるならば、この分

析的方法を繼承する・いわば第四の教授學が『教授學の落穂拾い』であり、これは、「教授學」と、それから獨立した「學習學 (Mathetica)」とからなる⁽²⁾。
 ところで、右にコメニウスが自ら「類比」(syncretism)⁽³⁾とよび、コメニウス研究者によって、あるいは自然との Parallelismus⁽⁴⁾、あるいは pirozená metoda⁽⁵⁾ (自然的な方法)と特徴づけられている方法とは、どのようなものであるのか。この方法の生成をうかがうためには、われわれはボヘミア語『教授學』にまで溯らなければならぬ⁽⁶⁾、本稿ではまず『大教授學』に限定してこの方法をたずねてみよう。

『大教授學』(ODO—I, p. 5—col. 196) は、いわばその序文にあたる部分(巻頭におかれた『讀者へのあいさつ』、教育學への志向を著者が先向する『獻呈狀』、および『教授學の效用について』と題する短文)のあとに、總論ともいふべき部分をおき(人間の存在の意味と使命とを語る第一章—第四章、教育の可能性と必然性と其の諸條件とを示す第五章—第一〇章)、續いて、従來の學校教育の諸缺陷を指摘、批判し(第十一章)、『學校の改善の可能性を論じ(第十二章)、その學校改革の基礎が「あらゆる面で周到に配慮された秩

序 (Reformandarum Scholarum fundamentum, esse in accuratum in omnibus Ordinem) 以外にないこと」を説き(第十三章)、そのような秩序が「自然から借りられなければならない」(Ordinem Scholae accuratum a Natura mutuandum esse)」ことを主張している(第十四章)。

ところで、第一章以下、とりわけ『大教授學』が自らの目的として立てている・教授・學習の確實、容易、徹底、迅速、を獲得する方法を示す第一六、第一七、第一八、第一九章、および、「知識の方法」(第二〇章)、「技術の方法」(第二一章)、「言語の方法」(第二二章)、「道德の方法」(第二三章)、「敬虔を滴注する方法」(第二四章)など、いかえれば『大教授學』の中核にあたる諸章の論述に照すならば、まさにこの第一四章こそ、これら諸種の教授方法の原理——コメニウスのいう「秩序」——を發見する方法を語る箇所に外ならないのである。

「教授と學習との方法が、あたかも不動の岩壁の上にされるように、その上に構築されるべき基礎」の究明の開始を告げるコメニウスが、「究明されるべきものは、自然の中以外には (non alibi quam in Natura) 現れない」と斷言するよりどころは、「技術(教育の技術を含め

て」は、自然を模倣するのではなく、なにこともなしえない (Artem nihil posse nisi Naturam imitando)』とするテーゼであり (以上、第四章、第一節)、それゆえ、著者は第二節以下でこのテーゼの論證に立ち向うのである。——海を走る船は、魚の遊泳器官を模倣し、空を飛ばうとしたダエダロスは、鳥の翼を模倣しなければならなかった (第二節)。笛や囊笛などの吹奏楽器は、動物の發聲器官を模倣し (第三節)、硫黄と硝酸とからなる火薬は、電火の成分と作用とを模倣した (第四節)。隔った二口の容器に盛られた水が、同水準の表面を好むことに基いて考案された導管装置は「人工ではあるが、しかし自然である。その装置は、人工によるが、装置の働きは、自然の力による」 (第五節)。回轉する天球が時の経過を告げるところから、その日々の回轉を示し時間を測る装置が工夫される。それは、世界の第一靜止者たる地球を模した臺座、支柱、外枠と、運動する天體に倣った・種種の齒車とから成る。自然から借りられた「重力」 (主齒車の廻轉軸に取り付けられた錘りの)、あるいは「解放力」 (主軸に巻き付けられた鋼製發條の) が、主齒車を動かす、光それを通じて他の齒車を動かすのは、「星の創造者が、光

に、自ら働き他を動かす力を與えたのに倣う」ものにならぬ (第六節)。——

右の事例こそ、諸技術は、自然の力を基礎とし自然の秩序を模倣することによって初めて、成立することを語る、とするコミュニクスは、「これらすべてのことから明らかなのは、すべてを教えかつ學ぶ技術にとって普遍的な元型であるとわれわれが考える・かの秩序は、自然という教師以外からは、取られてはならないし、また取られることはできない、ということである (Ex omnibus his patet, Ordinem illum, quem Arti omnia docendi ac discendi universalem ideam esse cupimus, non aliunde sumendum esse, aut sumi posse, quàm à Nature magistro)」 (第七節)、とし、欄外に、「教授技法の構築にあたり、自然的なものの模倣に堪する結論」と書き加えている。すなわち、コミュニクスによれば、教育の技術・方法は、自己の原理——「秩序」——を持たなければ不可能であるが、その秩序は、他の・もろもろの工作技術がそれを模倣することによって初めて成立している・自然の法則以外にないのである。「この秩序が周るな配慮によって確立されるならば、人爲的なものが圓滑

かつ自發的に (mollier & sua sponte) 進行するであろうことは、現に自然的なものが圓滑かつ自發的に流出しているのにひとしい」(同節)。教育の技術は、その成立の根據においては、他の工作技術と全く事情を同じくするのであり、いいかえれば、自然の諸法則を自らに攝ることによって、つまり自然の諸法則との類比において自らの秩序を確立することによって初めて、可能になるのであった。しかも自然の諸法則とは、ロメニウスの場合、自然の生産の秩序、進行經過の秩序を指すものであり、人間生産の技術(教育)が模倣しなければならぬのは、これである、と考えられていることは、彼が、自然ヲ案内者トスル限り、道ヲ過ツコトハ皆無デアル、とする・キケロの言を引用しながら、「われわれの望むところは、まさにここにある。われわれは、自然があれこれの生産にあたりいかなる進行經過をまゐるか、を観察することにより、同ような進行經過をたどることを」(人々に)「勧めるであろう (Quod nos speramus, eoque vos Natura in operando hic & illic servet processus observatō, similiter procedi sradebimus)」(同節)と述べているところから、知られるのである。

(1) 「」に引かれた・この一文は、初版にはなく、ODO 所収の時に、追記されたものと思われる (ODO-II, col. 93; ODO-Commentationes, 74)。

(2) 'Spicilegium Didacticum artium discendi ac docendi summam brevibus praeceptis exhibens; e MSSis Cl. J. A. Comenii collectum et editum a C. V. N. Amsterdam, 1680. (J. Kvackala: J. A. K. Korrespondence. II. Praha, 1902. str. 303—328. 所収)。これは、『學習學 (Mathetica h. e. Ars Discendi)』(str. 305—321)と『教授學』との二部から成る。

この作品は、クヴァマチャラが、ヘーゼンターラー (Magnus. Hesenhaler) と P. O. ニツリン (Christian Venzel Nigrin——右は C. V. N. とあるのは、彼のイニシャル) の書簡(一六八〇年五月七日付——Korres. str. 166—167)に基いて探求し、セントハルステルスブルク公立圖書館でその草稿を発見し、一八九五年に公刊したものである。

(3) もちろん、この語が『大教授學』で用いられているわけではない。われわれの知る限り、これは、『言語の・最新の方法』第五〇節以下で、「知識を植えつける方法」が提示されるさい、事物の内部認識は、三つの道、すなわち、事物の諸部分を「(1)分解し、(2)合成し、(3)他の事物と比較することによって」せられる、とし、「分解・合成・比較なる」対照。キリン語ではわれわれはこれを「分析・綜合・類比 (Analysis, Synthesis, Synorism) ヲ云々」として示しているところにも現われ(第六一節)、「それゆ

え、理性的な方法、すなわち理性を光の中に進ませる道は三つ、分析の道、綜合の道、類比の道 (*Trina ergo est intellectualis Methodus, hoc est, intellectum in lucem promovendi via: Analytica, Synthetica, Syncritica*) である。(第六二節) と書かれてゐる。

(4) „die so schönen und wahren parallelsimen zwischen dem entsprechenden naturvorgänge und dem unterrichts verfahren in der didactica magna.“ J. Kvakala: *Über J. A. Comenius' Philosophie insbesondere Physik. Inaugural dissertation.* (Leipzig) Lpz., 1886. S. 17. (これが、コミュニウス研究の先驅者ツヴァンチャラの、最初の仕事である)。

(5) パーネチエカは、『大教授學』における、リアリズム教授方法を集團教育をとまなう普遍的學校の思考よりも「さらに重要なのは、教授の自然的方法である」として、この方法原理の基礎が、自然と技術とのアナロジーである、という點をとりあげて餘りに近代化してこれを解することゝも正確でないが、さりとて、ここにコミュニウスの、中世的な神學思想だけを見るのも正しくない。むしろこれは、一切の現實は、基本的なアトムと關係との、最終的な數によつて、理解できる——という、當時の合理主義の發想の適用とみるべきである、とのことである ('Vybrané spisy JAK. Sv. I. (1958), Úvod prvního svazku str. 13—14.)。

(6) 本稿第一節注(3)のように、ボヘミア語『教授學』は、

提案される教授方法が「自然そのものからえられた基礎によつて有力に立證され、常に他の工作技術の實例によつて説明される」として、『大教授學』は、「提言されるものの基礎は、事物の自然そのものから發掘され、眞理は、工作技術の相似例によつて説明される」としてゐる。

(7) コミュニウスが、コスヘルニクスの地動説をとりな一方、この後に見られるように、光に力をみとめてゐることは、注目される。

(8) 『大教授學』第一〇章、第三節には、「學校が人間性の制作場である (Scholas esse HYMANITATIS OFFICINAS)」と語つた人の言は、「至言である」と述べ、また ODO 第三部所收の諸著作を回想する『ハンガリア招聘の寸話』中『「シャロッシュ」」タタの、著名な學校の理念』でも、同一の表現で人間形成をしるしつけてゐる (ODO-III, A₂ 'De Vocatione in Hungarian brevis narratiuncula. — Illustrius Patalkine Scholae idea,' 86.)。

六

では、教授學が模倣するべき・自然の生産の「進行經過 (Processus)」の秩序とは、具體的になにを指しているのであるか。これを示すのは、コミュニウスが、「第一章。教授と學習との一般的要求。すなわち、効果を齎らさずにはないような・確實に教授し學習する方法」の

中で、従來の教育ではその方法の不確定性から、教師が、一定の教育期間を限定することもできず、一定の教育目標も立てることができなかった事態を慨嘆し、確實に教育を進めて過たぬ・堅固な基礎を求めめるために、「(第一四章に見るように)まことにこの基礎は、「教授・學習の」技術の營み (operationes) を、自然の營みという規範に、できる限り嚴密に一致させる以外にないのであるから、われわれは、雛を孵す鳥を例として自然の道筋を究明することにならう (seruamur Nature vias in exemplo Avis pullos excludentis)。その足より (caujus vestigia) を園藝家、畫匠、建築家が模倣して成果をおさめているさまをみれば、少年の養成にあたる人々がどのような模倣を行うべきか、は容易にわれわれに承知されるであろう」(第五節)、と述べているのである。

たとえば、この章で教授・學習の確實性を獲得する方法のための「基礎第一。自然は、ふさわしい時期に留意する」の結論の一つ、「人間の形成は、人生の春、すなわち少年期に始められなければならない」(第一〇節)という・ほとんど自明なテーゼをとってみても、コメニウスは、これを、一つには、鳥は、種の繁殖を行う時期に、

萬物の凍る冬でもなく、萬物の燃える夏でもなく、萬物の生命力が衰え、生れくる雛をいためる冬の近づく秋でもなく、太陽が萬物に生命と活力とをよみがえらせる春を選ぶ、という例證に基く (exempli gratia) ・自然の生産経過の進行秩序の觀察に基礎づけているのであり (第七節) (二つには、園藝家もまた同じように (Sic Hortulanus)、植樹の時期として、濕りが根から昇り、木の幹や枝に生長を齎らす春を選ぶばかりでなく、施肥、枝打ち、枝下しにもそれぞれ「それにふさわしい時にでなければ手をくださぬように、配慮する (ut nihil nisi suo tempore agat, attendit)」) であり、建築家もこの例外ではなく (Non aliter Architectus)、木材の伐採、煉瓦の焼込み、土臺の据え、壁石の積上げ、漆喰塗りに、それぞれ「必ず最も適当な時期を心にとめなくてはならない (articulos observare necesse habet)」) というように、技術はすべて、自然の進行経過に適合した・自己の秩序を立てない限り、成就しない、という考察に基礎づけているのである。コメニウスによれば、従來の學校教育の方法の不確定性は、この基礎を犯し、才能の習練のため・正しい時を選ばぬところから、由來している。悟

性の根がいまだ固まらぬ幼児期も、悟性と記憶力がすでに衰えている老年期も、ともに教えられるにふさわしい時期ではなく、悟性の力が様々の事物に分散している中年は、教えられるに困難である。「生命と理性との活力が高まってきて」「すべてが発育し、容易に深く根をおろす」少年時のみが、教授・学習にふさわしい・正しい時として選ばれなくてはならない。そして、これこそ、人間生産の技術が、自然の生産の秩序、工作技術の生産の秩序とへの類比に基き、その模倣に基いてえた原則であった。

同じ第一六章の「基礎第二。自然は、形態の提起に先立ち、素材を用意する」もまた、自然と工作技術とへの類比の方法に基くものである。鳥はまず (primam) その血滴から胚子を胎内にはらみ、ついで (tam) 巢を作つて卵を生み、その後、初めて (dentim) 雛を孵し育て巢立たせる。思慮ある建築家もまた、建築に着手するに先立って (antegrant) 必要素材を十分に集積し、後日その不足から作業の滞滞、建物の緩みが生ずることをふせぐ。畫匠、園藝家、みなしかりである。しかるに、従來の學校は、この點でも右の基礎を犯している。たとえ

ば、事物を教える前に言葉を教える (Sermone Scholae doctum ante Res) のがそれである。本来「事物が實體であり言葉は屬性である。事物が體軀であり言葉は衣服である。事物が核心であり言葉は外皮であり外殻である」にもかかわらず、數年にわたつて言葉の技法を教えた後に初めて、數學・自然學などの實科學習に (ad studia realia) 進ませている。いな、言語の教授においてさえ、順序の顛倒が常であり、言語の素材 (materiam sermone) を與える・作家の作品から始めるべきであるのに、言語の形態 (formam) を教えるにすぎぬ文法から始めている。あるいはまた、教授にあたって抽象的な規則を先にし、後から付加した實例によつて規則を説明する方法をとっている。しかし、光は、それが照し出すべきものに先行するのが本来であらう——。このところからコミュニウスは、「根本から方法を改善するために」として、言語教授の以前に悟性が養成されなければならず、言語は文法からではなく、しかるべき作家から學ばなければならず、實科が論理諸科學に先行し、實例が規則に先行しなければならぬ、等のテーゼを、あの類比に基いて掲げるのである(以上、第一三節—第一八節)。

同じように、教授・學習の確實性を求めての・第一章殘餘の・七箇の「基礎」も、容易性を求めての・第一章一〇箇の「基礎」も、徹底性を求めての・第一章一〇箇の「基礎」も、ことごとく、難を孵す・鳥の營みと、これと秩序を同じくする・諸工作技術の手續きとへの類比によって、うち出され、迅速性にいたる方法をたずねる・第一章八箇の「問題」も、右の二九箇の「基礎」の上に提起されるに外ならない。

われわれは、右にわずかにあげた・二箇の「基礎」によっても、次ぎの二點を知ることができる。すなわち、第一。『大教授學』において教授・學習の・正しい時期としてえらばれる少年期が、『言語の・最新の方法。第一〇章』にいたって、前述した Docilitas の概念に包攝され、同じように、『大教授學』における・實例の・規則にたいする優先性のテーゼが、『第一〇章』にいたって、教授方法の核心である手段配置(實例・指示・模倣)に包括されてくる。第二。『大教授學』における・少年期の適合性は、自然と技術との秩序への類比に基いてえられるのにたいし、『第一〇章』の Docilitas 概念は、知識の増大のための要素分解からえられる。同じように、

『大教授學』では實例の優先性は、自然と技術とが示す素材の・形態にたいする先行性に基礎づけられているのにたいし、(兩者に部分的には共通の論理があるとはいへ)『第一〇章』で實例と指示とを包括する手段配置は、根本的な「知る」概念の構造分析から導出されたものである——。この二點からわれわれは、『第一〇章』のコメントは、『大教授學』と同じ目的を追求しながら、第一に、そこで示した教授方法を包括するような・より豊かな概念を、第二に、分析的方法によって、獲得した、ということが出来る。とすれば、イエリネクが『第一〇章』を指して、「教育學方法の理論的根據」を示すもの、とする評言だけは、承認されることになる。けれども、『第一〇章』での分析的方法が「教育學の本質についての・また、教授學の原理的基礎についての・著者(コメニウスの)思念の變化を反映する」とし、『第一〇章』こそ「眞の教授學」であって、これに比すれば『大教授學』は「方法的實踐の手引きにすぎない」とする・イエリネクの見解は、次節に見る理由によって、受容しがたい、といわなくてはならない。

七

『大教授學』を貫ぬく《類比》の方法について、われわれは、イエリネクとともに、それが、「彼〔コメニウス〕の・啓示の概念からきている」ものと考える。「コメニウスは、宇宙に實在するすべてを創造したのは神であり、神は、三つの書——自然の書、「人間の」精神の書、聖なる書——の中に自らと自らの業とを啓示した」と考えた。この三書はすべて、著者を同じくし、したがって、三書は必然的に完全無缺な調和の關係にあり、一書において分明ならぬものはすべて、他の二書の一つに含まれる相似例によって、明らかにされるのである」(p. 112)。イエリネクは右の見解を支える出典を明らかにしてはいないけれども、類比の方法をコメニウスにとらしめた・この基本觀が、彼によって初めて、自覺的に語られるのは、實は、汎知學にかんする第二作品『汎知學の意圖の解明 (Conatum Pansophicorum Dilucidatio, Leszno, 1638.)』(ODO-I, col. 453/4—482) の中で、同一テーマにかんする前作『汎知學の序幕 (Pansophiae Praedictum, 一六三四年執筆)』(ODO-I, col. 403/4—454) を顧み

ながら、「目的は、しかし、神の諸書、すなわち、自然の書、聖書、および人間の意識の書」の (Hibrorum Dei, *Nature, Scripture, Conscientiaeque humanae*) 要約を完成することであった」としている箇所である⁽¹⁾。

ポヘミア語『教授學』の執筆とほぼ時期を同じくする『開かれた・言語の扉 (Janua Linguarum Reserata, Leszno, 1631.)』(ODO-I, p. 250—302) に引續き、「キリストとアリストテレスとの結合」⁽²⁾、「啓示と自然科学との融和」⁽³⁾を求めて、ビベス、カムパネルラ、ペイコンの諸思想の攝取と批判との中から生れた『自然學摘要 (Physice Synopsis, Lpz 1633.)』が、「可視的な世界にある・すべてのものは、自然から生じたか、技術から生じたか、である」として、技術の世界を重視するばかりでなく、「自然から發するものは、神が初めに創造したものが、あるいは、物に内在する力によって造出されたものか、である」と自然科学の對象をこれに限定するのは當然であるとして、「しかしながら、自然は技術に優先する。いな、技術は、自然を模倣するものでなければ、無である。自然の力に基いて造るのでなければ、無であるから (Imo ars nihil nisi naturam imitatur: quin nihil nisi naturae

「Facti……」必然的に、技術の基礎として自然がおかれなければならず、技術を學ぶ者は、まず自然を徹底的に認識して、自然が常になにをつくり、どのような力によってつくるか、を知らなければならぬことに、なる。これが認識された時に初めて、技術の秘密はおのずからあらわになるであろう」と述べる時、もとより、この自然學者の・直接の契機は別のところにあつたとはいへ、結果においては、右の把握が、この時期から制作を開始された・ラテン語『大教授學』での・自然への類比の方法を決定した、といえないであろうか。なぜなら、本稿第五節に述べたように、『大教授學』の方法を提示する・その第一四章の中心テーゼは、右に引用した『自然學摘要。序説』の行文と全く軌を一にする・自然⇨技術關係の把握に貫ぬかれ、表現すらいちじろしく相似しているからである。

いなそればかりでない。(本稿ではなお、この間の・コメニウスの思考の發展徑路について立ちいって論ずる用意はないけれども)、前引の『汎知學の序幕』にいたれば、まず、その第一テーゼが、「われわれ人間の知識、いな正しくは汎知(omniscientia)ともいふべきものを、完成する三者

がある。すなわち、神についての知識、自然についての知識、技術についての知識、がこれである」(第六四節)、としるしているように、かつて『自然學摘要』の中で自然と相並ぶ世界部分とされていた技術は、今や汎知の三要素の一としての地位を確定されることになる。第二に、『自然學摘要』での・技術による・自然の模倣、技術にたいする・自然基礎性は、「技術は、自己の生産の元型を、自然から借り、自然は、神から、神は、自己自身から借りる」(第七一節)、とする第八テーゼに定式化され、われわれをして直ちに『大教授學』第一四章の前引行文を想起させるのである。しかもまた第三に、ここでコメニウスが『大教授學』の「讀者へのあいさつ」第一〇節の場合と同じく、教育改革の先驅となつたラトケ、アンドレアエらの名とともに、またカムパネルラ、ペイコンの名をあげて、學習方法の改善のためにこれら著作家を涉獵し、「自然の・ゆるぎない法則と規範とを求めて、あらゆるものを探究し、さまざまに心を勞した末、私の手の中に、あらゆる人にあらゆるものを、迅速に、徹底的に教える技術を示す大教授學が、生れ出たのである」(第九七節)、と述懐していることに照すならば、汎知を

構成し自然に元型をとるべき技術とは、教授の技術を自らのうちに含むところのそれであり、前記『汎知學の意圖の解明』における・神の三書性の「人間の意識」もまた、教授・學習の技術の主體の意味をも持つものであった、といえよう。

ボヘミア語『教授學』に始まり、このような経路で、『大教授學』制作と相並んで定式化され、またその中に定着して行く・教育技術の・自然への『類比』の方法が、『言語の・最新の方法。第一〇章』にいたって、『分析』の方法によって代置されるとするイエリネクは、その機縁を、『大教授學』草稿に加えられた批判にみている。

「彼〔コメニウス〕は、異論の中のあるものは、單なる揚げ足とりであることを示して、あら探しの批判者たちにこたえた。しかし、彼の諸著作の歴史にとってより重要なのは、彼が自らの方法の洗練と、その適用範圍の擴大と、敘述の・より以上の精密化とに努めた、ということである」(p. 17)。

イエリネクは、ここでも右の典據を明らかにしていないのであるが、パテラ、およびクヴァチャラそれぞれの編集にかかる・コメニウス『往復書簡集』に照す限

り、『大教授學』草稿に加えられた批判は、一六三九年一月、在ロンドンの友人ヨアキム・ヒューブナー (Joachim Hubner) がコメニウスにあてた書簡⁽⁶⁾以外には、見いだされない。

ここでヒューブナーは、『大教授學』については、まず、この作品は十分な精確さをそなえず、「出版するに適當でなく」、汎知學の前提たるに足りない、ときめつけた後、第一に、コメニウスの提唱する教授技術が「ひとり學校にのみ限定されており (omnis fere ars docendi ad scholas tantum restringitur)」たとえば、教會という教育の場が考慮されず、「學校の外にあるものがあたかも人間の生活にとって無益であるかのように」みなされている點を不満とし、かつまた、ここに提案されている學校についても、それを實際に組織する方法——教師の採用、學校の建物、費用——などの・重要な點については「この作品全體を通じて、全く沈黙が守られている」、と非難し、第二に、キリスト教徒はこの教授技術に疑いをはさまぬにしても、「すべての人に教える技術」にふさわしく異教徒を納得させるとすれば、「貴君がここに示しているよりもはるかにゆるぎない論旨をもってしなけ

ればならない (Longe firmitibus argumentis, quam a Te hic afferuntur, sunt convincendi)」と、第三に、「全巻を通じて、敘述の・緊密な秩序と配列とがみられない (Principio nullus in toto opere……certus apparet rerum ordo et dispositio)」ことを初め總じてスタイルの不精確さを難じ、「第一三章にいたっては、著者を愛する讀者とても、讀むにたえるであらうか」とまで言い放っている。さらにヒュープナーは、第四に、コメニウスの『自然』概念にたいして、「自然というものによって貴君がなにを意圖されているのか、十分に明らかに規定されている箇所はどこにもない (nullibi enim, quid per naturam velis, clare satis definitur)」ばかりでなく、自然への類比によれば「人は、なにを學び、あるいは究めようと欲するにせよ、自然に墮し獸類に墮し、いなむしろ無生物にすら墮落せざるをえないのではないか」(An homo, si quid discere aut invenire velit, ad Naturam……ad bestias, imo vel ad ipsamet inanimata ipsi est obediendum)」と評し、第五に、コメニウスが、(自然への類比により)自らの立てる教授方法をア・プリオリに立證しよう、とのべている點をとらえて、「しかし、それは、

貴君が、すでにそれ以前から——あるいは自然の本能により、あるいは經驗の導きによって——承知しておられたところを、他の事物への比較によって、思い出されたにすぎなく (……quae jam ante instinctu partim naturalit, partim experientia duce noveras, ex comparatione vero cum rebus aliis in memoriam modo tibi revocabas)。だから、貴君がア・プリオリに發見したと稱されるもの自身、實は、種々の實驗をへた後でなければ、そのように主張することを許されないのである」と反論する。

ヒュープナーの・右の五點にわたる批判の當否を吟味することは、本稿の目的に屬さない。問題は、コメニウスが、この批判にこたえるにあたり、とくに類比の方法をどのように反省したか、にある。ところが、前引の往復書簡集は(これだけが、現在、この間の經緯をうかがうに足る資料であるが)いづれも、コメニウスの回答と見られる内容の書簡を一つも收めてはいないのである。そこで、往復書簡集以外に、これに近いものを求めるとすれば、それは、コメニウスが、『教授學全著作集』の刊行にあたり、自らの思考の歴史を回顧しながら、オラン

ダの讀者に自己の事跡を告げるために執筆してその第四部に収めた『知えの箕』(Ventilabrum Sapientiae) (ODO-IV, col. 412-64)である(イェリネクが、この作品を、「一六五七年の教授學全著作集までは出版されなかった」(p. 17, note 23))として、あたかもヒューブナー批判の當時に書かれたかのようにしているのは、完全な誤りである)。

この『知えの箕』は、『大教授學』はじめ『言語の・最新の方法』、『開かれた・言語の扉』など數編を回顧しているのであるが、コミュニウスは、まず、『大教授學』について次ぎのようにしている。「第一四章およびそれ以下においては、かの・キケロの・自然ヲ案内者トスル限り、道ヲ過ツコトハ皆無デアル、という言にしたがい、『教授』方法の改革の基礎は、自然の模倣である、ということが主張されている。しかしここに、有力な非難の聲があがったことを、私は思い出すのである(將來また、誰かがあげるであろうけれども)。すなわち、その非難は、この『私の』議論は、——鳥は雛を孵すにあたってしかじかの経過をたどる、だから、われわれ人間の才能の形成にあたってもしかじかの経過をたどらなくては

ならぬ——という論法を用いるのではないか、ということであった。「私の議論を」拒否する人々は、相似物ハマシク説明ス、サレド證明セズ (Similia illustrant quidem, non autem probant) という・論理學者の・あの法則の楯にかくれているのである」(第三二節)。ここにいわれる反論は、前引のような・ヒューブナーの批判の趣旨に異ならないのであり、また同じヒューブナーが、「まことに、教授の技法の基礎がなんであるにせよ、それが獸類や樹木から與えられる以外のものではないとすれば、教授技法の基礎は、獸類によって作られるもの、樹木から産み出されるものであり、こうして人間の學習は、獸類以上に出るものではなくなるのである。……貴君が、自然からつくり出し、自然物と諸技術との例證に基いて説明する・あの普遍的公理……の大部分は、眞理であることは、私も認める。しかし、それが教授の基礎であることは、私は拒否するものである (……omnia illa universalia axiomata, quae de Natura efformas, quae rerum Naturalium et artificialium exemplis illustras……. Agnosco illa maximam partem esse vera, docendi fundamenta esse nego)」と反論する言辭に符節を合するものに外な

らない。

ところで、『知えの筈』のコメニユウスは、これへの反論として、『再三實見されたところの、一を他にかかわらしめて洞察し、一を他によって有力に論證する、知え。別名、かくれたるものを究め、明らかならざるものを照し出し、うたがわしきものを論證し、混沌たるものを秩序づけるためにする・類比の方法の・最も有効な援用にしよう』(SAPIENTIA BIS & TER OCCULTA, Aliud in alio acutè videns, aliudque per aliud potenter demonstrans, Hoc est, De Syncreticæ methodi ad res latentes evestigandam, obscuras illustrandam, dubias demonstrandam, confusasque ordinandam, potentissimo usu.)』と題する小論説を執筆したことを告白し(同節)、『あらためて、類比の方法を、次ぎのように規定している。すなわち、「事物が精神によって観られるさいに、(分析の場合のように)それ自身において分解もされず、また(総合の場合のように)合成もされず、その事物と同じ形相をもち、しかも自らの原因、部分、作用、その他を、より明快にあらわにする・なんらかの・他の事物と照合される場合に、私は類比の教授方法とよぶ(Syncreticam docendi Me-

thodum appello, ubi res in conspectu mentis neque resolvitur in seipsa (uti fit in Analytica) neque componitur (ut in Synthetica) sed confertur cum alia quæpiam re ejusdem formæ, causas suas, partes, effectus, & alia sua, expressius ostendente)。それ自身からは十分に認識されぬものが、その相似物から認識されるのが、これである」(第三三節)(イェリネクが、この論旨を『スコラ學者の迷宮からの脱出』(E Scholasticis Labyrinthis Exitus)』(ODO-IV, col. 63/4-76) のもとに引用するは、誤りである)。前述した・神の三書性の思考を知るわれわれにとり、コメニユウスが、相似物の證明せず、説明スルノミ、とする・論理學者の法則は、「不適合な相似物、あるいは部分的相似物についてののみ、真であるにすぎない。同一の元型に基いて造られた相似物は、まさしく證明する。いいかえれば、論證し立證し、人々を確信させ、沈黙させる」(第三六節)と反駁する根拠は、理解するにたたくないであろう。

このようにしてコメニユウスは、「だから私は、大教授學の・あの數章(第一四章から第二〇章にいたる)について、なに一つ變更を加えるものでなう(Nihil proinde

capitibus Didacticæ M. (XIV usque ad XX mutuo)』と断言するにとどまらず、續いて、「學校と學校教師とは、若樹の、小鳥の、雀蜂の、蜘蛛の、そしてまた、それらを模倣する園藝家の、織匠の、建築家の、畫匠の、またいかなる種類とを問わず工作技術者の・巧妙に秩序立てられた營みと、そこから立ち現われる・精妙に組み立てられた作品とを熟視するがよい」と教えて、あくまでも、正しい教授技術は、自然と工作技術との生産過程の吟味のうちに立ち現われる・それらの・進行の法則と秩序とへの類比から、發見されることを、力説してやまないのである（以上、第三七節）。

イエリネクが、コメニウスの方法は、類比のそれから分析のそれに變換し、變換することによって、眞の教授學を成立させた、とする見解にたいし、われわれが疑問を抱く根據は、いうまでもなく、このところにある。右に見たように、『大教授學』成立後二〇年になんなんとし、『言語の・最新の方法』刊行後一〇年に近い年月をけみした時點において、六十五歳の著者がなお類比の方法の生産性への確信を披瀝していることに照すならば、たしかに後者の作品の中に分析の方法が出現してい

ることはまぎれもない事實であるにせよ、イエリネクの立言のように、これを方法上の「變換」と解することは、できなくなる。（なにゆえ、分析の方法が新に登場したのが、その間の消息は、われわれの・今後の研究課題であるけれども）さしあたっては、コメニウスが類比の方法を決して斥けはしなかった、という以上に語ることができないのであり、これを、分析の方法が類比のそれに代置されたという意味での變換とも、まして、變換によって眞の教授學が構築された、とも評することは許されないであろう。われわれは、イエリネクが、『知えの箕』に言及しながら、自己の立言にとって明らかに不利な・コメニウス自身の評言をつたえずにいる意圖を、あやしまざるをえないのである。

ところで、『知えの箕』は、『言語の・最新の方法』についてどのように回顧しているであろうか。「同書の第一〇章は、かつてないほど眞剣に、教授學の基礎を探究している。……とりわけ、ここでは（大教授學の場合のように）類比の方法によってではなく（これが大方の不評を買ったことを、私は忘れていなかった——前出第三二節参照）、分析の方法によって、つまり、教授と學習との行爲の中

に相會する・すべてのものを分解し、それらの本質をその最深部から抽出することによって、論が進められていく。だから、かかる思考への専念に喜びを見いだす人にとって、數多くの・うるわしい・教授學の小寶石が発見されうることを、私は疑わないのである (Plures reperiri posse pulchras Didacticas gemmulas non dubito)。(第四九節)。これを回顧とよぶのは、正しくない。そこには、老思想家が分析の方法の豊饒性に寄せた・限らない期待が脈うっているのを、われわれは理解しなければならぬ。そしてそのことは同時に、コメニウスが、前述のように、いかに類比の方法への執心を示しているにせよ、それによってまた分析の方法をも斥けたものでは決してない、ということを示す。

とすれば、われわれとしては、いよいよコメニウスにおける・二つの方法の等價性をいわざるをえないけれども、果して、二つの方法が等價であった・と評するにとどめてよいかどうか、が問題になる。ここにわれわれは、あらためて、あの『自然學摘要』においてすでに、數學的分析の方法をコメニウスが重視していたことを、思いおこす⁽¹⁾。また、『大教授學』にあっても、類比の

方法は、實は、自然と技術との生産過程の《分析》によってその秩序が析出される、という前提がなければ、いかに三書性の基本觀があつても、有効性をもたなかつたであろう、ということに氣づく。逆にまた、『第一〇章』の・實例・指示・模倣の手段配置は、たしかに元型・複製の手段・複製、という《知る》概念の基本構造から演繹されてはいるけれども、しかしこの・元型・複製という構造それ自身が、『大教授學』第二章「技術の方法」に示された・技術習得の秩序への《類比》によって着想されていることを、知る(だからこそ、コメニウスは『第一〇章』で、右の手段配置の秩序にかんする公理を「自ら實現している」例證として工作技術の習得をあげるのである。本稿第四節)。とすれば、われわれのたずねるべき課題は、このような・二方法の生成と錯綜とを、再びコメニウスの思考の根元からあとづけるところにあることに、なるであろう。

けれども、ここでわれわれが注目しておかなければならぬことは、イエリネクのように、作品の順序において最新なものにこそ眞の教授學が現われる、という見解をとることではなく(この見解は、コメニウス自身の證

言によって否定された)、自己の思考生産の成果のいづれをも、自己にとって最終的なもの、窮極的なもの、完結したもの、として承認することなく、そのいづれをも、開かれた試みと観じ、その收穫を未來の手にゆだねる。コミュニウスの自己提示の仕方であろう。『教授學全著作集』新版の序文「教授學全著作集の成立と構成とについて」の執筆を擔當したノートチュカ(Jan Patocka)が、「著者「コミュニウス」は、自己の著作を、完結した成果としてではなく、發展の中にあるものとして、提示しようとして欲した。しかし、その發展とは、最後の段階が、常にまさしく最も完全な・最も成功した段階でなければならぬ、とする評價を下す底のものではないのである(autor nechce podat své dílo jen jako hotový výsledek, nýbrž v jeho vývoji, a tento vývoj neoceňuje tak, že by poslední etapy musily vždy býti právě nejdokonalější a nejzdaritější)」旨を繰返して強調し、「人間の現實を、その過去から、その生成から理解して、それ「現實」を完結した・純粹な成果や、一束の處方箋に還元しようとは欲しない・歴史家およびフィロログとしての・驚嘆すべき能力」をコミュニウスの中に認めている評言は、

まさに《類比》の方法と《分析》の方法とを顧みる・コミュニウスの態度の中に、最高の妥當性を見いだすのである。

(1) 一六四五年頃からその晩年に至るまでコミュニウスが意を注いだ七部作『人類、なかんずく、ヨーロッパの學識者、宗教者、權力者に與える・人事の改善にかんする總勸告(De rebus humanarum emendatione Consultatio Catholica, ad Genus Humanum, ante alios vero ad Eruditos, Religiosos, Potentes Europae)』(ODOには收められていない)は、一六五六年ないし一六六二年に、その第一部『汎覺醒(Panegesia)』と第二部『汎照(Panangia)』との公刊をみたにすぎない(『總勸告』については、本論叢、五月號『ノート』(1))。第三部『汎教育(Pampaedia)』の中でコミュニウスは、「神は、われわれに、全體を成すに足る・三つの書を與えたにすぎない。すなわち、われわれをとりまく・神の被造物を伴った世界、われわれのうちにある・悟性の眞理を伴った精神、われわれの以前からある・言葉をもつてしるされた・聖書の啓示、……この三書が知の泉である」と述べ、「汎知の學校、全體についての・眞の知識の學校とは、(1)可感界の總體と、(2)理性界の總體と、(3)精靈界の總體とを、換言すれば、Physica と Metaphysica と Hyperphysica とを、順次に究明する學校であり、かゝらねばならぬ」と書してゐる(Klaus Schaller: Die Pampaedia des Johann

Amos Comenius, Heidelberg, 1957, S. 29, 註用)。シキ
ミーの著作「ワレの三書は、完全な調和の中にある。
だから、すべて「の書」の中に原理的には、同一のものか
読みとられうるのである」と述べている (Schaller, S.
20)。

(2) 'Physicæ ad Immen divinum reformatæ Syno-
psis philodidacticorum et theodidacticorum censuræ
exposita', Lat. Text.—Deutsch. Übers. von Jos. Reber.
Gießen, 1896, p. 30.

(3) J. Kvačala: Uher J. A. Comenius' Philosophie
insbesondere Physik. Lpz., 1886, S. 43.

(4) 『自然學摘要』は巻頭に、「自然は、暗く・ぼんやり・異
教徒の燈火によってではなく、クリストが世界の闇の中に
投げ入れた・天日の炬火によって、究め盡されなければなら
ぬ」とする・ユアン (Juan Luis Vives) の言葉 ('De
disciplinis', 『學問の尊厳について』第13編 'De traden-
dis disciplinis', 『學問の尊厳について』第4) を證する
こと。

トメシトウスは、カマンネストラ (Tommaso Campane-
lla) の「哲學改造の先驅」とよびその著作『現實哲學綱
約 ('Realis Philosophiæ epilogisticæ partes IV')』
と、『事物の意味と魔術について ('De sensu rerum et
magia libri IV')』を學んだことを見て、ヤーナン
にこそは、『諸科學の』大改造 ('Instauratio Magna')』
をあげて、「新たに開く世紀の・最も輝かしい・星の星」

と語っている。

(5) 'Physicæ Synopsis', Prolegomena, p. 48.

(6) 「序文」には、學習方法は是正に心寄せる人々から、
哲學少くとも自然學について、の考えを講かれた、「かつて
私が學校で講じた」自然學の摘要を (ワレは「ぼんや
り」Prerov での教師時代に編集した『各事物界の魔術
(Theatrum Universalis Rerum. To gest Diuadio
swéta a wseecných wssudy předivých wčý geho,
etc.)』を著して、) 交わったこと、と述べている。

(7) A. Pateta: Jana Amosa Komenského Korrespon-
dence. Praha, 1892.

J. Kvačala: Korrespondence Jana Amosa Komens-
kého. I. (Spisy JAK. Číslo 1.) Praha, 1898.
do: Korresp. JAK. II. (Spisy JAK. Číslo 5.) Praha,
1902.

J. Kvačala: Die pädagogische Reform des Come-
nius in Deutschland bis zum Ausgang des XVII ja-
hrhunderts. Bd. I. Texte. (Monumenta Germaniæ
Paedagogica. Hrsg. von Karl Kehrbach, Bd. XXVI.)
Berlin, 1903. 147 右1編なる抜粋した書簡集の巻頭
巻・45について公認されたこと。

(8) Kvačala: Korres. [1.] str. 73—82. do: Texte, p.
141—157.

(9) Korres. str. 75—77.; Texte: p. 144—148.

(77) コメニウスにおける Methodus analytica と Methodus syncritica

- (10) Kortes. str. 77; Texte: p. 147/148.
(11) コメニウスは「その一切の論證が自己直観 (autopsian) に基いて演繹され、すべてが、先行するものよりもよく知られたものによって秩序づけられて、中間項を跳躍することがない」數學の方法を、メタフィシカ、

- 自然學、神學、倫理學、政治學にも適用すべきである、と示唆している (Physicæ Synopsis, p. 32)。
(12) ODO. Tom. III. (Commentationes.) Úvod. str. 78.
(一橋大學助教授)